

2020 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 入選

どうか、自殺しないで

(原文はフランス語)

ムピハリー・マヘファ・ラザフィンドラベザンドリナ (20 歳)

マダガスカル・アナラマンガ地域圏

ワン・ウェイ・フォー・チェンジ (非営利団体)

アンタナナリボ、2030 年 6 月 9 日

日曜は毎週、私は自宅で過ごす。夫は近所のハシエンタへ出かけた。ハシエンタは地元住民が世話を
する共同農地で、自分たちが食べる普通の食料が育てられている。WWF が生態系プログラムを立ち上
げたことを受けて、各地域で自給自足プロセスを始めることに、多くの国 (マダガスカルを含む) が同
意した。地元の起業家の支援と国際協力のおかげで、プロジェクトは大成功を収めている。私の夫もプ
ロジェクトの一員だ。

いい機会なので、家の中を片付けることにした。新しい盆栽を置いたとき、棚の上に置いてあった物
に目がとまった。十字架だ。10 年前の出来事を思い出させるもの。この手紙は君、2020 年の私に宛
てて書いたものだ。

そう、君が男の子を好きになる男の子であると、両親が気づいたのはその年だった。君が地獄に行く
と強く信じて、君が教会の司祭と会うことを求めた。その司祭は、いつか君がこの「病気」から「回復」
できるよう願って、この十字架をくれた。そして君は、クロルフェニラミンの錠剤を飲んで自殺しよう
と考えた。

幸いなことに、君は新しい友達を作り、そのおかげで生き続けることができた。お互いに惹かれ合っ
たけれど、彼がイスラム教徒の家庭出身だと知って、一緒になれるかもしれないという希望をすべて
失う。自殺願望が遠ざかることは決してなく、将来への不安や恐れも消えなかった。

でも今日は、素敵なお一日になりそうだ。2 時間後、毎週開いている文化交流ランチに近所の家族がや
ってくる。君が最近始めた恒例イベントで、今週は君の家が当番。夫がハシエンタから食材を採ってき
て、君がご近所さんのために料理する。オーガニック食材でいっぱいのテーブルを囲んで、参加した家
族が交流してお互いを理解するんだ。セシリアとサンドラは現在進めている養子縁組の申請手続きに
ついて、アフマドとヤスミナは最近のラマダン中の慈善活動について、オリビアはまだ小さなネイサ
ンの理学療法セッションについて話してくれるだろう。

こんな話は信じられないかな。イスラム教徒カップルが同性愛者カップルと同じテーブルにつこう
とするなんて、不思議に思うだろう。「レズビアンカップルが養子縁組を検討する?」「結婚が可能な

の？」と。ましてやここは、そんな変化が起こるとしても、世界で最もその可能性が低そうな国の一つ。

差別がまったく存在しない世界を信じることは難しい。侮辱が頭上から降り注ぐ日々の糧である世界では、信じることは難しい。

ジャーナリズムの学位を取得した後、私はマダガスカルの人々に対する差別についてレポートを書いた。このレポートでピューリッツァー賞を受賞して、ますます国際的に注目されるようになった。この機会を活かして有力機関とのつながりを持ち、雑誌を発行した。

雑誌の創刊以来、私たちは毎週、LGBT+の若者から彼らが受けた暴力と差別について何千もの証言を収集し、アフリカ各地の心理学者のオフィスと協力して彼らの話を聞いている。

強い思いがこめられた彼らのメッセージのおかげで雑誌は、たくさんの若者がLGBT+であることを主張できるきっかけとなっている。国際機関の支援を受け、大陸全体に変化の風が吹いてきた。性的指向に関連する死刑は廃止され、性別を問わず、全国民が合法的に結婚できることを多くの国が認めている。

今日も私は書き続けている。本当にやりたいことだから。私は文章を通じて、発言できない人の声になり、一人ぼっちだと思っている人を支え、死にたいと思っている人に希望を与えたい。10年前の私——君のような人に。

だから自殺しないでほしい。君と同じ状況にある何百万人もの若者が、声を上げられないでいる。彼らのために語ってほしい。死なないで、君は大切な存在だから。どうか自殺しないで、彼らには君が必要なのだから。